「震災からの復興　～高校生が今できること～」　宮城県本吉響高等学校

１．活動の概要

昨年度、本吉響高等学校家庭クラブは、「フカ肉」を活用し、地場産品の普及活動へ向けた研究を行い、地元をはじめとして多くの方々に「フカ肉」を使った料理について知ってもらうことができました。しかし、３月１１日、私達の住む気仙沼・南三陸を大地震と大津波が襲いました。私達の地域の被害は甚大なもので、本来であれば引き続き、「フカ肉について」研究を進めていくはずでしたが、港等の被害も大きく、「フカ肉」をテーマに研究や活動を行うのは難しいという結論に達しました。

私達の生活は一変し、この震災によって家族を亡くした方、家屋が流出した方、職場を失い生活が苦しくなった方等、これまで人々が築き上げてきた生活は津波により、一瞬にして奪われ、多くの方々が大変な生活を強いられました。そのような中、「私達高校生には何ができるのか、役立つことはないか」と考える日々が続きました。私達が生まれ育った大好きな町が瀕死の状態に陥っている。「何とかしなければ・・・」と強く心に誓ったことを今でも鮮明に覚えています。震災から学校が再開するまでには２ヶ月もかかり、その間は、電気もなく、水道も使えない生活を強いられました。私達は家の手伝いをしながら「自分達にできることはないか」と模索する生活が続きました。正直、一日一日の生活を送ることで精一杯でしたが、私達よりも困っている方、助けを求めている方は沢山いると考え、家庭クラブ員で話し合いを重ね、「私達が今、できることを実践していこう」という結論に達しました。幸い、先生方が震災直後に「気仙沼・南三陸」の避難所へ向けて、応援メッセージを作成し、避難所に出向いて下さり、流れを作って下さったので、今度は私達がそれを引き継ぎ、地域の方々の助けになれればと考え、この活動テーマを設定し、以下の活動を行いました。

１　応援グッズの製作
２　子ども向け工作教室の開催
３　農業クラブとの連携
４　高齢者への支援
５　災害ボランティアとしての活動
６　アンケートの実施
７　産業まつりへの参加

２．活動の成果等

１　応援グッズの製作
（１）熱中症対策としてクールネックの製作
　　（冬場はホットネックとしての活用）
（２）メッセージ入りうちわの製作
（３）エコバックの製作
（４）食生活の一助としてレシピ本の製作

この震災で人々の生活は一変し、精神的にも疲れ果てている方々が多く、応援メッセージで少しでも元気を取り戻していただきたいと思い活動しました。

２　子ども向け工作教室の開催

子ども達に手作りカレンダーを持って行き折り紙で作った昆虫や動物を貼ってもらいました。幼い子ども達も震災によって怖い思いをしており、早く笑顔を取り戻してほしいという思いで企画しました。子ども達はニコニコ笑顔でカレンダーを作ってくれました。

３　農業クラブとの連携

農業クラブ員が愛情を注いで育てたプチトマトと本吉響米を仮設住宅の方々に届けました。住民の方々は嬉しそうに受け取ってくれました。

４　高齢者への支援

仮設住宅に伺って、住民の方々と一緒にお茶を飲みながらお話をしたり、マッサージをさせていただきました。少しですが住民の方々にもリラックスしてもらうことができ良かったと思います。また、初めて、顔を合わせた方々もおり、人々のつながりの場にもなりました。気仙沼市社会福祉協議会の職員の方々と一緒に活動（写真１）できたことも私達にとっては収穫の一つで、人との関わり方等を学ぶ機会にもなりました。このつながりを大切にまた、伺いたいと思っています。

（高齢者の集会所を訪問して）

５　災害ボランティアとしての活動

私達は気仙沼市社会福祉協議会を通じて災害ボランティアとして活動してきました。当日は、市内や県外から５０人を超える人々が集まり、がれきの撤去や田んぼの泥だし等７つの作業に分かれて活動しました。私達は津波の被害に遭われた方々の大切な写真の洗浄、乾燥、写真データの保存、スクラップのお手伝い（写真２）をさせていただきました。写真の状態はとてもひどい物が多かったのですが、細心の注意を払って作業をしました。作業をしている最中も写真に写っている方々の安否が気にかかり、涙が出そうになりました。写真に写っている方々の無事と、大切な写真が一日でも早く手元に戻ってほしいという願いを込めて作業をさせていただきました。この日の活動は人々の想いを感じた一日となりました。

（災害ボランティアとして）

６　アンケートの実施

私達はこの震災で、「何かできることはないか」と考え、日々活動してきましたが、私達の仲間の多くも、学校が再開されるまでの間はボランティアをして過ごしていたようで、具体的にどのようなことをして過ごしていたのかを知るために全校生徒３３５名を対象にアンケートを実施しました。結果は多くの高校生が地域の方々のために献身的に活動していたことが分かりました。中でも、一番、多かったのが、「給水作業」で 128 人、「物資運び」で 70 人、「物資の仕分け」と「子どもの面倒」が 55 人となりました。その他にも多くの高校生が地域の方々のためにボランティアに参加しており、中には一人で複数の活動をしていた生徒もいました。高校生の「地域の方々の助けになりたい」、「何かしなければ！！」という思いが表れた結果となりました。

７　産業まつりへの参加

水産業復興への一助として地元の食材を使用し、フカドック、はらこ飯、鮭団子フライ等を作り、販売させていただきました。地元の方々に気仙沼の味を届けることができ良かったです。

今回、私達はこの震災で「自分達に何かできることはないか」と考え、様々な活動を行ってきました。今後は、本吉響高校の仲間とのボランティア活動及び他校へ向けてのボランティア活動の発信と連携を課題として、さらに活動を充実させていきたいと考えています。

私達は今回の活動を通して、個々へ支援していくことの大切さを学びました。町の復興、人々の生活の再建にはやはり、国や県、市町村の力が必要不可欠です。しかし、個々の要望に沿った支援をしていくためには、国や県、市町村等では限界があるのではないかと考えさせられました。行政においても住民の個々の要望に沿い、支援することはなかなか難しいですし、人手も必要とします。しかし、私達高校生と外部の機関が一緒に活動すれば、個々のより細かい要望に応えられる環境が整うのではないかと考えています。また、高校生一人ひとりが一歩踏み出し、動いていくことがボランティア活動の普及につながり、地元の復興へ向けての「地域力」にもなっていくと考えます。震災から９ヶ月経過した今、人々の疲労もピークに達していると思います。何よりも大切なのは地域住民の気持ちをつないで耳を傾けていくことだと考えます。気仙沼・南三陸がそれぞれの街として再生・復興していくための根幹となるのが人であり、つながりであると考えます。住み慣れた土地を離れて生活を余儀なくされている方々が一歩踏み出せるよう、笑顔を取り戻せるよう私達が「潤滑油」の働きをしたいと考えています。それが結果的に人々の気持ちをつなぎ、前向きに生活していける力になれると思うからです。私たち本吉響高校家庭クラブは、今後も様々な方々と連携して地域のために活動していきたいと考えています。